

ある時期に出合えばいいが、そうでない場合は調査もれが度々あった。効率の良い調査を行なう為にも、それぞれの種の生活史を知ることは大切に思われる。生育期において、イヌタヌキモとノタヌキモの区別は初めて観察する者にとって、現地では難しかった。色々な疑問について、本多(1957)の報文を参考に自生地と栽培下を比べながら観察した。北九州市には殖芽を形成するイヌタヌキモ、一年草といわれるノタヌキモ、年中常緑で過すが、環境の変化に敏感に対応して生活するイトタヌキモが自生する。1985~1988年にかけて、3種類のタヌキモ類の生活史を調べ、多少の知見をうる事が出来た。さらに検討を加えて観察を続けたいと考えている。今後のより詳細な研究の参考になれば幸いです。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、タヌキモ類に関する多くの情報、文献の提供とご指導を頂きました神戸大学角野康郎助教授、色々御助言を頂きました自然史博物館上田恭一郎学芸員、北九州大学畑中健一教授に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 福岡県高等学校生物研究部会, 1975. 福岡県植物誌. 339p., 博洋社, 福岡.
- 本多郁夫, 1957. タヌキモの結実と発芽. 採集と飼育 19: 84-87, 88.
- 角野康郎, 1985. ノタヌキモの生態. 水草研究会報 22: 5-8.
- , 1989. 日本のおもろい水草—その自然史 7. タヌキモ類の分類と開花・結実をめぐる. 日本の生物 3(2): 63-68.
- 三木 茂, 1937. 山城水草誌. p108. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第18冊.
- 大野睦子, 1984. 北九州市若松半島西部の植物. 福岡の植物 10:128-133.
- , 1990a. 北九州市産のイヌタヌキモの変異と生活史. 水草研究会報 42: 12-20.
- , 1990b. 北九州の植物(19) イトタヌキモ. わたしたちの自然史 3: 17.

○Peter Taylor "The Genus *Utricularia*-a taxonomic monograph" (HMSO, 1989, 724p)

著者がライフワークとしてきた世界のタヌキモ属に関するモノグラフである。各形質や生態、地理的分布などに関する概説のあと、本属214種に関する詳細な記載が続く。類似種については識別のポイントが具体的に整理されている。Introduction にもあるように、タヌキモ類は押し葉標本にしてしまうと観察が困難な特徴もあり、多数の液浸標本と合わせ研究を進めたものであり、このモノグラフが完成するまでの苦労談は感動的ですからある。さて、その内容は我々日本の研究者にとってきわめて興味深く、今後の研究に対する意欲をかき立てられるものである。ここでは、そのような問題を一つだけ紹介しておこう。

最近、日本ではタヌキモとイヌタヌキモの分類について意見が分かれている。すなわち、小宮定志博士らのタヌキモを *U. australis* とし、イヌタヌキモはそのフォルムとする考え方と、角野らのタヌキモ *U. vulgaris* var. *japonica* とイヌタヌキモ *U. tenuicaulis* は完

全な別種であるとする意見である。この問題に対するTaylorの結論は明快である。今までタヌキモとして扱われてきたものもイヌタヌキモとして扱われてきたものも、全て *U. australis* であって、日本には *U. vulgaris* は産しないという。このように小宮博士の見解に近いものとなっている。しかし、私はなおこの結論に疑問を抱く。今、学名の問題はさておくとしても、日本に二つのタイプの「タヌキモ」が現に分布し、それらは形態ばかりでなく生態的にも、繁殖生物学的にも明らかに異なっているという研究結果が着々と集積されつつあるからである。いったい日本に産するタヌキモの正体やいかに？という問題が、ますます興味深いものとなってきた。

モノグラフというのは研究のひとつの到達点であると同時に、あらたな研究の出発点でもある。その意味で、これはきわめて刺激的で日本の研究者にさまざまな問題を投げかけているすばらしいモノグラフと言えよう。

(角野康郎)